HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学新渡戸カレッジ ： ボランティア ： ボランティア体験学習 ： 一日体験実習週間「2016年7月6日-7月13日」調査報告書
Author(s)	木村, 純; 川畑, 智子
Description	編集 ： 川畑智子（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門新渡戸カレッジ担当） 協力 ： 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門事務; 北海道大学新渡戸カレッジオフィス
Relation	Hokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブ - 世界に開かれ世界と協働 -（平成26年度文部科学省スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」）平成28年9月16日
Issue Date	2016-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/70098
Type	report
File Information	volunteer_2016_taiken.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学新渡戸カレッジ　ボランティア

ボランティア体験学習
一日体験実習週間

2016 年 7 月 6 日～7 月 13 日　調査報告書

Hokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブ～世界に開かれ世界と協働～（平成 26 年度文部科学省スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」）
平成 28 年 9 月 16 日

北海道大学新渡戸カレッジ　ボランティア

ボランティア体験学習

一日体験実習週間

2016 年 7 月 6 日～7 月 13 日　調査報告書

Hokkaido ユニバーサルキャンパス・イニシアチブ～世界に開かれ世界と協働～（平成 26 年度文部科学省スーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」）
平成 28 年 9 月 16 日

編　集　川畑智子（北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門新渡戸カレッジ担当）
協　力　北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門
　　北海道大学新渡戸カレッジオフィス

目次

はじめに 1
Ⅰ．一日体験実習週間　概要 3
　一日体験実習週間　概要 5
Ⅱ．調査概要 7
　調査概要 9
Ⅲ．調査結果　概要 11
　調査結果　概要 13
Ⅳ．考察 14
Ⅴ．結論 15
　今後の展望 15
Ⅵ．調査対象者の特徴 17
　アンケート実施対象者 19 名の特徴 19
Ⅶ．集計結果（単純集計） 21
１．一日体験実習週間　参加先と参加者数 23
　１－１．今回のボランティア活動の体験の有無 23
２．参加状況 23
３．学習目標の内容と達成の有無 24
　３－１．　学習目標の達成の有無とその理由 25
４．ボランティア経験の有無 26
５．関心のあるボランティアと印象に残ったボランティアの変化 27
　５－１．　最も関心がある理由 27
　５－２．　最も印象に残った理由 28
６．困ったこと悩んだこと 29
７．問題解決の有無 29
　７－１．　ボランティア活動中に困ったり悩んだりした理由（自由記述回答） 29
８．共感の程度　事前と事後の変化 31
９．一日体験実習週間の体験（自由記述） 33
10．学生からの意見・感想 34

Ⅷ．統計解析の結果 35
１．分析結果の概要 37
２．分析結果 37
１．　参加したボランティアの数と事後の共感の程度の関係について 37
２．　学習目標の達成の有無と事後の共感の程度の関係について 40
Ⅸ．資料 45
１．事前アンケート　調査票 47
２．事後アンケート　調査票 51
３．事前研修　配付資料 55
４．七夕まつり企画運営委員会　プレゼン資料 60
Ｘ．一日体験実習週間の模様 65
１．事前研修の模様 67
２．北大キャンパスウォークツアーの模様 68
３．「留学生とアフタヌーントーク」の模様 69
４．野外美術館作品解説ボランティアの模様 70
５．七夕まつり企画の模様 71
６．ふりかえり会の模様 73
謝辞 75

報告書の発行にあたって

木村　純

１．一日体験実習週間について

本報告書は、新渡戸カレッジの授業「ボランティア」の一環として、この講義を選択し、受講した学生によって、2016 年７月６日（水）から 13 日（水）にわたって取り組まれた共同のボランティア活動の観察と体験による学習の結果を報告するものである。

事前学習・事後学習に加えて、学生たちが観察し体験したボランティア活動は、第１に、札幌国際プラザで実施されている外国語ボランティアネットワークの活動（参加観察)、第２に、本学のキャンパスガイドツアーボランティアの活動（参加観察)、第３に、札幌時計台ガイドボランティアの活動（参加観察)、札幌芸術の森野外美術館ガイドボランティアの活動（参加観察)、第４に、本学の国際本部の留学生支援ボランティア（実際に活動に参加し、企画・準備・実施を行う)、ということであり、芸術の森野外美術館の活動はあいにくの雨であったことなど予想外の事態にも直面しながら、関係者の献身的なご協力を得てそれぞれ延べ 12 名～18 名の学生が参加し、学習することができた。

２．新渡戸カレッジ「ボランティア」授業はボランティア活動の体験を通してどのように学ぶか

新渡戸カレッジ「ボランティア」授業においては、従来は、提供されたいくつかのボランティア活動の情報について、学生が自ら参加を希望する活動を選択し(私たちは、指導の際に「ボランティア活動」の重要な特質である「自主性（言われてもしない)・自発性（言われなくてもする)」を重視し、自ら活動先を決めるということを大切にしてきた)、活動先が決定してから教員との個別の面談を行い、その活動を通して何を学ぶかを自ら考え、気づくプロセスを尊重してきた。そして活動終了後に再び教員との個別面談によって学生にふり返りを促し、何を学ぶか、自分自身のキャリアデザインや留学を含む今後の勉学生活の課題とどのように結びつけるかを自ら考えさせ、その結果について報告会を実施して、受講した学生全員でそれぞれの活動結果に対する質疑応答を通じてひとりひとりの学生が学んだことについて理解の共有を図り、その報告会でなされた報告にもとづいて、いくつかのグループに分かれて共同のふり返りをワークショップの方法で討論を通じて行ってきた。

３．一日体験実習週間で学生が学んだこと

私たちは、実際のボランティア活動で学ぶこととボランティア教育でのボランティア活動体験で学ぶことが同じではないということを自覚したうえで、このように授業のなかで「義務的に」活動を計画し、体験させることと、上述した「自主的・自発的」な活動を行うように努めることを重視することとの「矛盾」について、どのように考えているかを次

に述べておかなければならない。

それは、やはり授業のなかで同じ活動を共同することでより学生がボランティア活動にはどういう意義があるか、自分たちが体験したボランティア活動から何を学ぶことができるかを学習することの意義がより大きいと考えたからである。つまり、共通の活動体験にもとづき、ふり返りを行うことで、気づき、学ぶことを重視したのである。この過程で発揮され、またその必要性に自ら気づくことができる表現力やコミュニケーション能力などが彼らにとって大切なものであると考えたからである。実際に、彼らは留学生のために自分たちで企画・実施した「七夕まつり」など、より積極的に参加した活動で最もよく学ぶことができることに気がついたり、ボランティア活動を実施することで直面せざるを得ない悩みと自ら向き合うことについてより深く考えざるを得ないこと、そしてそのような想いに多くの学生が共通に捉えられることを学んだのである。

岩川直樹は、PISA リテラシーについて論ずる論文で、今求められている「グローバル人材の能力」の両義性に関わり次のように述べている。

「グローバル人材」としての能力が必要であると捉えられるようになったのは、「グローバルな競争システムのなかで、人的資本の量と質への関心が増大し，労働市場がこれまで以上に柔軟で広範な社会的スキルをそなえた労働力を要求するようになったことに対応する」ことが要請される一方、「多様な民族的・文化的な背景が交錯するグローバルな状況のなかで、個人が自分の人生をつくり，市民として政治的・社会的に参加する力量を示す」（岩川直樹「教育における『力』の脱構築」久富善之・田中孝彦編著『希望をつむぐ学力』明石書店，2005 年）という意味を合せもっている。このような両義性をしっかり理解しながら、今一体どのような能力が求められているかを共に考え合うことこそが重要である。私たちは「ボランティア活動」の体験によって「得られた」問題意識や悩みに学生たちが共に向き合い、そこで直面した問題の背景や解決方法を討論することが、とくに後者で述べられているような能力を高めるうえで大切であると考えているのである。

このような機会を与えてくださった新渡戸カレッジの長岡宗男フェローをはじめ、札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークや札幌芸術の森野外美術館の皆様に心から感謝をいたします。

2016 年 12 月

Ⅰ.　一日体験実習週間　概要

一日体験実習週間　概要

実施目的:　学生のボランティアへの参加意欲を支援すること。

実施主体:　北海道大学新渡戸カレッジボランティア科目担当　木村純・川畑智子

実施期間:　７月６日（水）～７月 13 日（水）

実施場所:　下記のとおり。

学習目標:　ボランティア活動を観察し、参加し、企画・運営するという体験を通じて、学生がボランティア活動に参加する（一歩踏み出す）勇気をもつことができる。

到達目標:　下記のとおり。

事前研修	**7/6(水)　ガイドボランティアによる講演および指導・助言**
講師	長岡宗男氏（札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク役員）
内容	「北大キャンパスガイドツアーについて」 （始めたきっかけ、 開始までの準備作業、運営、ガイドの楽しさを紹介）
事後研修	**7/13(水)　一日体験実習週間　ふりかえり会**
内容	参加先のボランティアや担当者を招待し、学生の実習体験についてふりかえりをし、意見交換、感想などを述べる。

一日体験実習週間　３つのステップ

ステップ１.

参加者として参加しながら、ボランティア活動を観察する。

到達目標	個々のボランティア活動はどのように成り立っているのかについて観察し、そのしくみと役割について理解できる。
実習内容	7/9(土) 9:45～15:30 札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークの活動観察 ＜午前の部＞ ①北大キャンパスウォークツアーのガイドボランティアの活動を観察する ②札幌時計台のガイドボランティアの活動観察（時計台内） ＜午後の部＞ ③「留学生とアフタヌーントーク」のボランティアの活動観察
実施場所	①北大キャンパス内 ②札幌時計台内 ③札幌国際プラザ内
参加者数	14 名

ステップ２.

ボランティアに指導・助言をもらいながらボランティア活動に参加する。

到達目標	一市民として社会に参加し、社会貢献活動を通じて、社会で活躍する多様な人々と交流しながら同じ目標に向かって活動できる。
実習内容	7/10(日) 10:00～12:00　野外美術館作品解説ボランティア ボランティアに指導・助言をもらいながら、札幌芸術の森野外美術館に展示されている作品のブロンズ磨きに参加する。 (雨天/小雨の場合、野外展示作品の紹介、野外美術館作品解説ボランティアの活動紹介)
実施場所	札幌芸術の森野外美術館内
参加者数	12 名

ステップ３.

地域のボランティア活動に参加してボランティア活動を企画・運営する。

到達目標	地域コミュニティのニーズや課題を発掘し、それに対応するボランティア活動を企画・運営できる。
実習内容	7/12(火) 11:30 ～13:30　留学生支援ボランティア 「留学生のための日本紹介　テーマ:七夕」(札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク SKY と北海道大学国際本部の共催)に参加し、「七夕まつり」について英語で紹介するボランティアを企画・運営する。
実施場所	北海道大学国際連携機構 1 階ロビー内
参加者数	18 名

＜協力機関＞

札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク

札幌芸術の森野外美術館

北海道大学国際連携機構

Ⅱ. 調査概要

調査概要

調査目的:

「一日ボランティア体験実習週間」が、学生のボランティア活動に対する態度にどのような影響を与えたのか（態度変容）について知ること。学生がボランティア体験から何を学んだのかについて考えるための参考として試験的に実施した。

調査主体:　新渡戸カレッジボランティア科目責任者
木村純　北海道大学名誉教授（専門分野：生涯学習）
川畑智子 北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門（専門分野：社会学）

調査対象:　2016 年度新渡戸カレッジボランティア受講生 19 名

調査期間:　2016 年 7 月 6 日（水）～ 7 月 13 日（水）

調査方法:　質問紙調査。記名式。授業時に学生に配付し、その場で回収した。
回答時間　５～10 分

実施回数:　全２回
事前アンケート実施日：　2016 年 7 月　6 日（水）　授業開始前に配付
事後アンケート実施日：　2016 年 7 月 13 日（水）　授業終了後に配付

調査項目:　基本属性: 氏名、学年、学部

・事前アンケート:　以下５項目　設問数５
ボランティア経験の有無、参加予定の実習の種類と経験の有無、最も関心がある実習、学習目標、ボランティアに対する態度（共感の程度）

・事後アンケート:　以下６項目　設問数６
参加した実習の種類、最も心に残った実習とその理由、学習目標の達成の有無とその理由など、困ったことや悩んだことの有無とその解決方法・未解決の理由、ボランティアに対する態度（共感の程度）、一日体験実習週間の感想

調査票:　本報告書「IX. 資料」を参照のこと。

Ⅲ.　調査結果　概要

調査結果　概要

アンケート回答者数

種類	実施日	配付数（出席者数）	回収数	回収率
事前調査	７月　６日(水)	19 人	18 人（提出なし１人）	94.7%
事後調査	７月 13 日(水)	18 人（欠席１人）	18 人	94.7%

1. **調査対象者の特徴**

　受講生 19 名のうち、女子が８割を占め、１、２年生が全体の８割を占めた。１年生８人は全員女子だった。学部は、総合理系が６人で最も多かった。

2. **参加先別にみた参加者数**

　参加先別参加者数は、回答者 18 人中、七夕まつり 17 人、留学生とアフタヌーントーク 13 人、キャンパスウォークツアー12 人、作品解説ボランティア 11 人、ガイドボランティア１人だった。３カ所以上のボランティア活動に参加した人が 13 人、１カ所のみ（七夕まつりのみ）が５人、２カ所が０人だった。

3. **学習目標の内容と達成の有無**

　学習目標の内容は、１、２年生と３、４年生によって異なっていた。学習目標の達成の有無は、回答者 18 人中、「はい（学習目標が達成された）」と回答した人は 8 人、「いいえ」が 3 人、「わからない」が 7 人だった。

4. **ボランティア経験の有無**

回答者18人中、過去または現在（調査時点）ボランティア経験がある人は13人だった。

5. **関心のあるボランティアと印象に残ったボランティア**

　事前では、留学生とアフタヌーントークが７人で最多であったのに対し、事後では、七夕まつりが最多の９人だった。その他については、大きな変化はみられなかった。

6. **困ったこと悩んだこと**

　ボランティア活動中に、困ったことや悩んだことがあった人は、18 人中 9 人で、全体の半数だった。このうち、問題が解決しなかった人は７人だった。

7. **ボランティアに対する態度の変容について**

　事前と事後の調査で共感の程度の平均値に大きな変化はなかったが、共感の程度の強弱や共感の項目の順位に変化があった。

8. **一日体験実習週間の体験**

　１、２年生は、肯定的なフレーズが目立つが、３、４年生は、リーダーとしての立場から反省的なフレーズが目立った。

9. **統計解析の結果**

　参加したボランティアの数が多いほど、「人とのつながりを大切にする」への共感が高まり、学習目標が達成すると「とにかく一度やってみる」の共感が高まることがわかった。

Ⅳ．考察

１．参加したボランティア活動の数が少なかった学生について

受講生 19 人中、5 人が「七夕まつり」のみの参加となった。これは、実習を行った 7 月 9 日と 10 日の土日に、他の授業の行事、カレッジの行事、部活の大会などがあったためである。また、学生の中には、２日連続で参加することが厳しいとする意見があった。これについては、一日体験実習週間の時期と期間を検討したいと考えている。

２．「七夕まつり」の企画運営について

学習目標の達成の有無について「いいえ」（3 人）と回答した理由は、いずれも「七夕まつり」に関するものだった。その内容は「留学生に話しかけられなかったから」「自分から行動を起こすことができなかったから」「もっと強引に誘導できたかな、と思う」であった。また、「困ったこと悩んだこと」の解決について「いいえ」（問題が解決されなかった）と回答した７人中５人が、「七夕まつり」の運営の課題を上げていた。その理由は、「連絡がとれなかった/連携がとれなかった」（３人）、「自分の役割がわからなかった/何をしていいのかわからなかった」（２人）だった。

「七夕まつり」では、学生たちは連絡調整が困難な中、事前準備をしたが、当日は、参加していたボランティアグループと活動内容が重なってしまうことがあり、留学生の彼らのブースへの呼び込みがうまくいかないなど、戸惑うことが多かった。今後は、企画内容を決める段階で、他のボランティアグループとの事前の連絡調整が必須である。

３．女性が増えると、女性のリーダーシップの機会が増える

毎年、受講生は、ほぼ男女同数であるが、本学の性別構成（男子 7 割、女子 3 割）と比較すると 2 割多く、今年度は特に女子学生が多い。受講生のうち３、４年生は３人でいずれも女性だった。女性がリーダーシップをとる機会はなかなかないことから、今回の「七夕まつり」の企画運営は、様々な困難もあったが、女性リーダーのキャリア支援という視点から見れば、課題に向き合い、最後まで忍耐強くリーダーシップをとり続けたという経験は、彼らにとって自信をもつきっかけになったのではないかと思われた。

４．一日体験実習週間は、学生の一歩踏み出す勇気を促進する

個々の学生の学習目標は、観察だけでなく、人々との出会いや実体験を通じて達成され、そのことが「とにかく一度やってみる」への共感を高め、学生に「一歩踏み出す勇気」に対する共感を高めていた。今回の一日体験実習週間の実施により、学生の個別のボランティア活動の開始時期が例年に比べ大幅に早まった。現時点（2016 年 9 月）でボランティアを開始した、またはボランティア先が決定した学生は、19 人中 16 人である。これは驚くべき効果である。その意味で一日体験実習週間は、ねらいどおりの効果を上げたと言える。

Ⅴ．結論

今回の一日体験実習週間では、学生は、スケジュール調整や連絡調整などの困難を抱えつつも、熱心にボランティア活動に取り組んでいた。「七夕まつり」の企画運営でリーダーシップをとった３年生、４年生の３人は、アンケートの感想で、悔いが残る結果となったことが読みとれた。しかし、このような困難の中、その困難に立ち向かい、最後まであきらめずにリーダーシップをとったことについては、評価に値するものであり、その悔しさをバネに、是非、またの機会にその経験を活かしてほしい。一方、１、２年生では、16 人中 13 人が３カ所以上のボランティア活動に参加し、８人が、学習目標が「達成した」と回答していた。低学年層では、多くの学生が、ボランティア体験の楽しさや学びがあったことや、ボランティア活動をする人々に対する理解が深められたことを感想にあげていた。

一日体験実習週間は、学生が個別に実習をする前に、同じボランティア活動に参加することで、一歩踏み出す勇気をもつことを目的として実施したものである。統計解析の結果、学年にかかわらず、参加したボランティアの数が多い人ほど、「人とのつながりを大切にする」への共感が高まり、ボランティア経験の有無にかかわらず、学習目標が達成すると「とにかく一度やってみる」の共感が高まることがわかった。

このことから、学生たちの「一歩踏み出す勇気」を引き出すためには、グループで同じボランティアに参加するだけでなく、多様なボランティア体験の機会を提供し、学生一人ひとりの学習目標の達成の機会を増やすことが重要であることがわかった。言い換えれば、一日体験実習週間の実施は、この点を考慮することにより、学生たちの一歩踏み出す勇気を効果的に引き出すことができることがわかった。同時に、このような条件下で、学生にボランティアをする機会を提供することは、一定の教育効果をもたらすことが証明されたと言える。

今後の展望

例年、ボランティア活動に参加する学生は、スケジュールに比較的余裕のある低学年層が多い。高学年では、専門課程の修学、留学、インターンシップ、就職活動など、将来の進路を見据えた様々な活動が活発に展開され、ボランティア活動に参加する機会が少なくなる。そのため、低学年から、ボランティア活動に参加する機会を提供することで、早期の段階から社会参画し、一般社会の人々と接触し、交流する経験をもつことが大切である。

低学年からボランティアとして社会参画することにより、地域社会で生活する多様な人々との出会いが学生のコミュニケーション力を向上し、ボランティアとして自らの社会的役割と責任を果たすことが、学生に達成感と社会に「一歩踏み出す勇気」を与える。

長い目で見れば、ボランティア体験学習は、早い段階から将来の進路や「働くこと」に対する学生の関心や動機付けを支援し、インターンシップや就職活動へのステップアップとして、学生から社会人への第一歩をより円滑にする“つなぎ”としての役割を果す、柔軟で有効なキャリア形成支援となるだろう。

Ⅵ.　調査対象者の特徴

アンケート実施対象者 19 名の特徴

性別は、19 人中、女子 16 人、男子３人で、女子が８割を占めた（図 1)。学年は、19 人中、１年生と２年生がそれぞれ８人、３年生１人、４年生２人で、１、２年生が全体の８割を占めた（図 2)。１年生８人は全員女子であった。学部は、総合理系が６人で最も多かった(表 4)。　次いで、農学部と工学部がそれぞれ３人、総合文系と文学部がそれぞれ２人、その他の学部は１人ずつだった。

表 1

性別	人数	%
女子	16	84.2
男子	3	15.8
合計	19	100.0

図 1

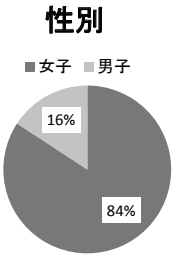


表 2

学年	人数	%
1年生	8	42.1
2年生	8	42.1
3年生	1	5.3
4年生	2	10.5
合計	19	100.0

図 2

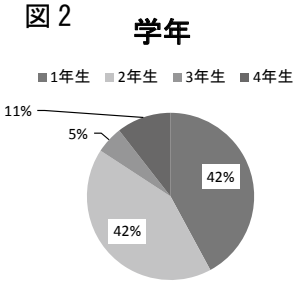


表 3

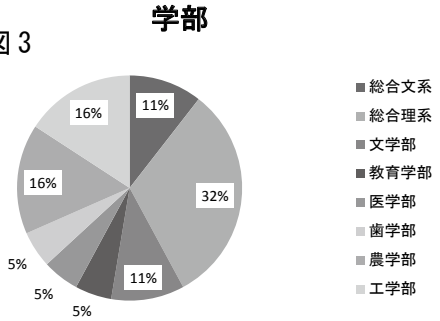
学年 と 性別 のクロス表

学年	性別		合計
	女子	男子	
1年生	8	0	8
2年生	5	3	8
3年生	1	0	1
4年生	2	0	2
合計	16	3	19

表 4

学部	人数	%
総合文系	2	10.5
総合理系	6	31.6
文学部	2	10.5
教育学部	1	5.3
医学部	1	5.3
歯学部	1	5.3
農学部	3	15.8
工学部	3	15.8
合計	19	100.0

図 3

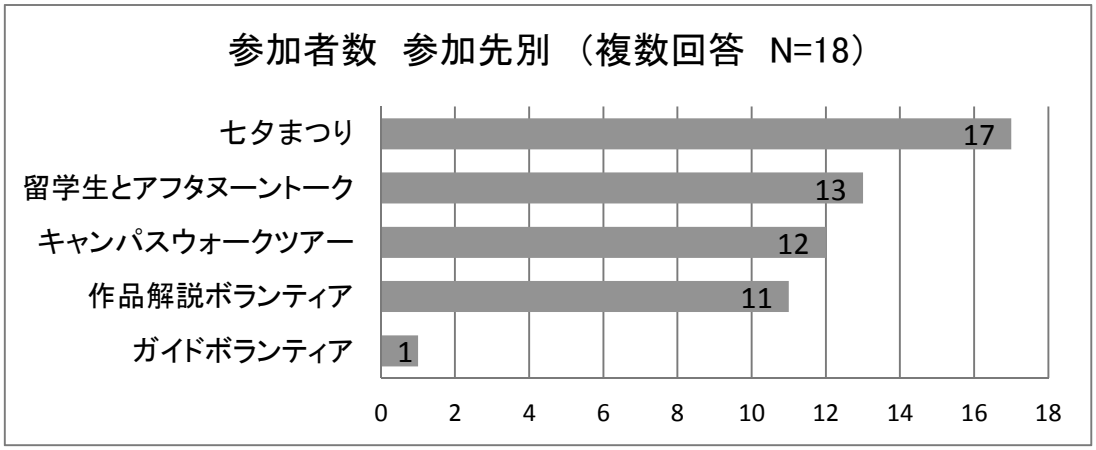


Ⅶ.　集計結果（単純集計）

１． 一日体験実習週間　参加先と参加者数

アンケート回答者 18 人中、七夕まつりに参加した人が 17 人で最も多かった（図 4)。次いで、留学生とアフタヌーントーク 13 人、キャンパスウォークツアー12 人、作品解説ボランティア 11 人、ガイドボランティア 1 人だった（図 4)。18 人の回答者のうち、これらのボランティア活動を以前にした経験がある人は皆無であったことから、今回が初めての体験となった(表 5)。

図 4



１-１． 今回のボランティア活動の体験の有無

表 5

体験の有無	人数	%
なし	18	100.0
合計	18	100.0

２． 参加状況

参加先の数は、上記５つのボランティアのうち、キャンパスウォークツアーとガイドボランティアは同時期に実施されたため、一人あたりの参加先の数は、最大４カ所である。その結果、４カ所が 10 人で最も多く、１カ所が５人、３カ所が３人で、３カ所以上のボランティア活動に参加した人が 13 人だった(図 5)。尚、1 カ所のみの参加をした５人は、全員、七夕まつりのみの参加だった。

学年別にみると、最大４カ所のボランティア活動に参加した人は、１年生８人中６人、２年生６人中３人、３年生１人中１人、４年生２人中０人だった（表 7)。１カ所のみのボランティアに参加した５人は、１年生 １ 人、２年生２人、４年生２人で、５人全員が七夕まつりのみの参加であった。その理由は、１、２年生は、他の授業や部活の大会、４年生は新渡戸カレッジの行事と時期が重なったためである。

表 6

参加したボランティアの数

参加先の数	人数	%
1か所	5	28.0
2か所	0	0
3か所	3	17.0
4か所	10	55.0
合計	18	100.0

図5

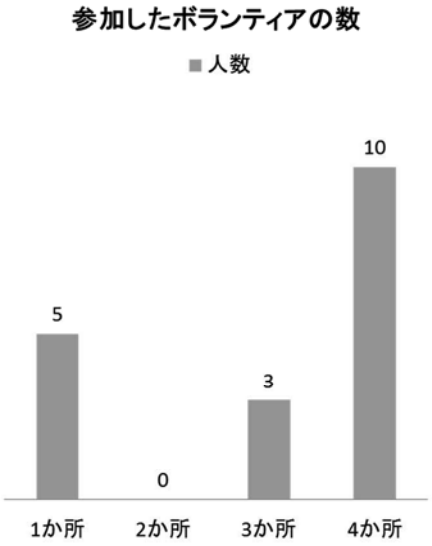


表 7　学年 と 参加したボランティアの数 のクロス表

学年	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
1か所	1	2	0	2	5
2か所	0	0	0	0	0
3か所	1	2	0	0	3
4か所	6	3	1	0	10
合計	8	6	1	2	18

３． 学習目標の内容と達成の有無

表８は、学年別にみた学習目標の一覧表である。１、２年生は、学習目標の内容を、ボランティアとは何かについての理解、ボランティアをする人々のモチベーションを知ること、自分が選択しなかったボランティアへの向き合い方、異文化交流の機会を大切にすること、周囲の人々との協調性を身につけること、自信をもつこと、自己点検、苦手克服、北大の魅力を再発見することなどをテーマにしていた。これに対し、３、４年生は、リーダーとしての抱負を述べていた。尚、学年による学習目標の違いは、上級生が中心となって七夕まつりの企画運営をしていたからである。

表 8

学年	学習目標の内容　（回答者数:16 人　無回答:2 人）
1	ボランティアをすることがどのようなことか理解し、自分に足りない点を見つける。
1	「まず、やってみる」ということを大切にする。
1	周りの人と協力して活動に取り組む。
1	英語を使ったボランティアは初めなので、臆することなく自分から話しかけていきたい。
1	自ら進んで取り組んで自信にしたい。
1	異文化交流をする機会はなかなかないので、この機会を大切にして色々な人と交流したいです。
1	人前でも話せるようになりたい。

学年	学習目標の内容（つづき）
1	札幌市内や北大の魅力を再発見する。他の人たちとの共同作業を通じて、協調性を身に付ける。
2	ボランティアがどのように行われ、どのようなモチベーションで行われているか知りたいと思ったから。
2	人前で話すことが苦手なので、この実習で克服したい。積極性に欠けるので積極的に自分からやることを見つけて取り組みたい。
2	実際に経験して、ボランティアとはなにかということを考えるきっかけにしたい。
2	グループの人と協力することで、協調性を身に付ける。
2	自分が選んだボランティアでなくても、「自分から楽しむ」という姿勢を大切にする。
3	リーダーになっているので、周りを見つつ、積極的に行動する。
4	臨機応変に対応する。テンパらない。周りをちゃんと見て動く、指示を出す。リーダーらしくいる。
4	グループリーダーとして、計画や役割分担などを適切に割り振れるようになりたいです。（自分個人では予定を詰め込みすぎたり、引き受けすぎてミスしてしまったりするので、メンバーの負担になりすぎないように考えたいです。）

３-１．学習目標の達成の有無とその理由

回答者 18 人中、「はい（学習目標が達成された）」と回答した人は８人、「いいえ」が３人、「わからない」が７人だった（表 9）。「はい」の理由として、「実際にガイドをしたから」、「自分が楽しい気持ちになったから」、「ボランティアにたいする必要性を感じ取ることができたから」、「留学生に声をかけることができたから」、「思い切ってできた」、などがあげられていた。「いいえ」の理由として、「留学生に話しかけられなかったから」、「自分から行動を起こすことができなかったから」などがあげられていた（表 10）。

これらの記述から、学習目標の達成の有無は、自己実現の有無、社会貢献に対する肯定的感情や積極性に対する自己評価によって判断されていた。

表 9

学習目標の達成の有無	人数	%
はい	8	44.4
いいえ	3	16.7
わからない	7	38.9
合計	18	100.0

図 6　学習目標の達成の有無

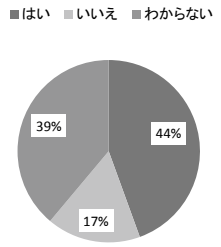


表 10

達成の有無	ボランティアの種類	理由
「はい」 8人中６人 回答	キャンパスウォークツアー	実際にガイドをしたから。
	キャンパスウォークツアー	英語でポプラ並木の説明をしたことで大変さが分かった。
	キャンパスウォークツアー	自然の中で活動して自分が楽しい気持ちになったから。
	七夕まつり	ボランティアに対する必要性というのをしっかり感じ取ることができたから。
	七夕まつり	留学生に声をかけることができたから。
	七夕まつり	やらなきゃいけないという中で、思い切ってできた。
「いいえ」 ３人中３人 回答	七夕まつり	留学生にはなしかけられなかったから。
	七夕まつり	自分から行動を起こすことができなかったから。
	七夕まつり	もっと強引に誘導できたかな、と思う。

４． ボランティア経験の有無

回答者 18 人中、ボランティア経験が「(過去に) あり」と回答した人は８人、「現在している」と回答した人は人で、ボランティア経験がある人は、合わせて 13 人だった (表 11)。他方、ボランティア経験が「なし」と回答した人は、５人だった。

図 7

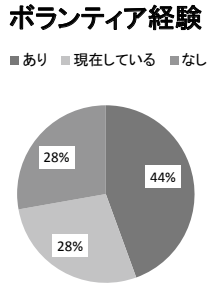


表 11

	人数	%
あり	8	44.4
現在している	5	27.8
なし	5	27.8
合計	18	100.0

５． 関心のあるボランティアと印象に残ったボランティアの変化

事前調査では、最も関心のあるボランティアについて、事後調査では、最も印象に残ったボランティアについて質問し、事前と事後の変化を見てみた。その結果、事前では、留学生とアフタヌーントークが７人で最多であったのに対し（図 8)、事後では、七夕まつりが最多の９人だった（図 9)。その他については、大きな変化はみられなかった。七夕まつりのボランティアに対する印象が強かった理由として、「ボランティアを企画・運営する」ことを目的としていたため、学生はこのボランティアへの積極的な参画が求められたからであると考えられる。また、留学生とアフタヌーントークには、ボランティア活動をする人々を観察する目的で参加したため、あまり印象に残らなかったと考えられる。

図 8

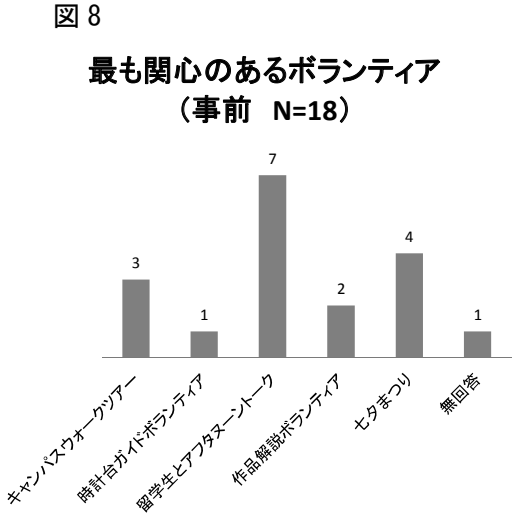
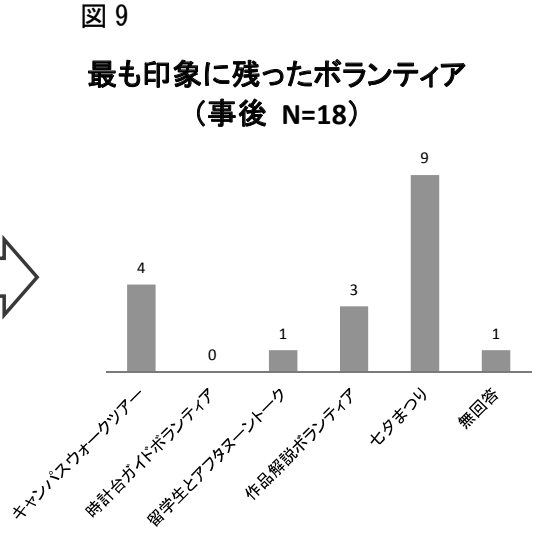


図 9



５-１． 最も関心がある理由

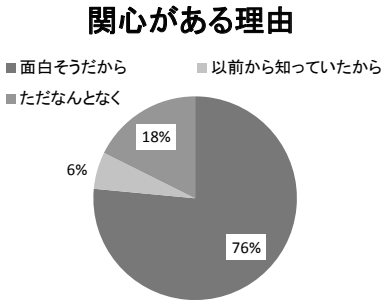
上記の事前調査で質問した「最も関心のあるボランティア」の理由は、「面白そうだから」が 13 人、「以前から知っていたから」が１人、「ただなんとなく」が３人で、７割以上がなんらかの関心を抱いてボランティアに参加していた（表 12、図 10)。

表 12

理由	人数（n=17)	%
面白そうだから	13	76.5
以前から知っていたから	1	5.9
ただなんとなく	3	17.6
合計	17	100.0

（無回答1名）

図 10



５-２． 最も印象に残った理由

上記の事後調査で質問した「最も印象に残ったボランティア」の理由は、表 13 のとおりである。キャンパスウォークツアー（回答者 4 人）については、「実際にガイドを体験できた」「ガイドツアーに興味があった」「ガイドするにも責任がかなり伴うことがわかった」という理由があげられていた。留学生とアフタヌーントーク（回答者 1 人）については、「留学生のことを一番よく知ることができたから」だった。作品解説ボランティア（回答者 3 人）については、「作品のガイドが楽しかった」、ボランティアの人と「身近で交流した」ことや、「ボランティアに憧れをいだいた」、「実際に体験できた」ことが理由にあげられていた。七夕まつり（回答者 6 人）については、「友達がたくさん参加してくれた」、「実際に自分たちで運営を行った」、「一番自分が関わった感じがする」、「自分たちで内容を考えた」、「たくさん考え、準備をした」などが理由に挙げられていた。これらの理由から、実際に体験をしたこと、自分たちで企画運営したこと、ボランティアの人と交流したこと、楽しかったことなどが、学生たちの印象に影響を与えていたことがわかった。

表 13

最も印象に残ったボランティア	理由　（18 人中 14 人回答）
キャンパスウォークツアー	実際にガイドをする体験ができたから。
キャンパスウォークツアー	実際にガイド体験をして、観光客の方ともたくさん話せて、ボランティアに「かかわった」という感じが一番強かった。
キャンパスウォークツアー	ガイドツアーに興味があったから。
キャンパスウォークツアー	北大について知らなかったことを知ることができた。ガイドするにも責任がかなり伴うことがわかったから。
留学生とアフタヌーントーク	留学生のことを一番よく知ることができたから。
作品解説ボランティア	作品のガイドが楽しかったから。
作品解説ボランティア	ボランティアの方々とより身近で交流し、ボランティアへの憧れをいだいたから。
作品解説ボランティア	実際に体験できたから。
七夕まつり	友だちがたくさん参加してくれたから。
七夕まつり	それしかやっていないので。
七夕まつり	実際自分たちで運営を行ったから。
七夕まつり	一番自分が関わった感じがするから。話し合いとか楽しかった。
七夕まつり	自分たちで内容を考えること、運営することは初めてだったので。
七夕まつり	たくさん考え、準備をしたから。

６． 困ったこと悩んだこと

ボランティア活動中に、困ったことや悩んだことがあった（「はい」と回答した）人は、18 人中９人で、全体の半数だった（表 14）。

図 11

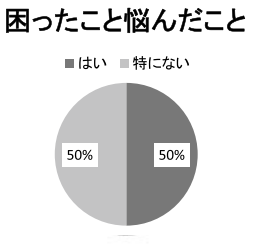


表 14

困ったこと悩んだこと	人数	%
はい	9	50.0
特にない	9	50.0
合計	18	100.0

７． 問題解決の有無

上記の設問で、困ったことや悩んだことがあったと回答した９人のうち、問題が解決した（「はい」と回答した）人は、１人だった（表 15）。問題が解決しなかった（「いいえ」と回答した）人は７人で、８割近くが課題を抱えたままボランティア活動をしていたことがわかった。

図 12

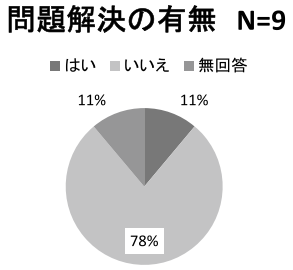


表 15

問題解決の有無	人数	%
はい	1	11.1
いいえ	7	77.8
無回答	1	11.1
合計	9	100.0

７-１． ボランティア活動中に困ったり悩んだりした理由（自由記述回答）

問題解決の有無の理由は、表 16 のとおりである。「はい」（問題が解決された）と回答した１人は、「連絡がとれない、積極性がない」ことを問題として取り上げ、その問題は、作業中に「案外やる気をもってやってくれていたと感じた」ことにより一部解決されたと回答した。「いいえ」（問題が解決されなかった）と回答した７人が抱えた問題の内容を要約すると、連絡がとれなかった/連携がとれなかった（３人）、自分の役割がわからなかった/何をしていいのかわからなかった（２人）、緊張や恥ずかしさで留学生とあまり話せなかった（２人）であった。このことから、７人中５人が、七夕まつりの運営の課題を上げ、２人が、コミュニケーションの課題を上げていたことがわかった。

留学生とアフタヌーントークはこのイベントを運営するボランティアの活動観察をする

ことを目的として参加したものであるが、内容は、１人の留学生を囲んで座談会形式で、日本語で留学生と等身大で対話し、議論するというイベントであった。学生たちの中には、留学生や他の日本人（学生や一般社会人）の目の前で話すことに場慣れしていないということが、学生たちの自由記述から読みとれた。

表 16　問題解決の有無とその理由

回答者	「今回の一日体験実習週間で困ったことや悩んだことはありましたか」について「はい」と回答した９人
設問内容	その問題は解決されましたか。（「はい」１人、「いいえ」７人、無回答１人）
「はい」 （1 人中 1 人）	その問題をどのように解決または克服しましたか。
回答	連絡がとれない、積極性がないと感じていた。模造紙を作ったときに案外やる気をもってやってくれていたと感じたが、一部なのではないかという点では解決していない。
「いいえ」 （7 人中 7 人）	それはどのようなことでしたか。
回答	七祭りで留学生に話しかけるのに緊張してあまり話せなかった。
	アフタヌーントークのグループディスカッションで結局促されるまで話せなかったこと。
	グループ間での連絡が上手くいかなかった。
	自分の役割が分からなかった。
	自分が何をすればいいのかわからないことが多かった。自分なりに探してみたが飽和気味だった。
	準備期間が短く、他のグループとの連携がとれなかったこと（準備）、活動中は恥ずかしさがでてしまい、留学生に話しかけられず不完全燃焼であったことです（7/12）。
	連絡が通じない。

８． 共感の程度　事前と事後の変化

一日体験実習週間は、学生が個別に実習をする前に、学生が同じボランィア活動に参加することで、一歩踏み出す勇気をもつことを目的として実施したものである。本調査では、実習前と実習後で、学生のボランティア活動に対する態度変容を検討した。態度変容を測定するための指標として、立田（2004）の「ボランティアを始めるための心構え」8 項目を使用し、それぞれの項目に対する共感の程度によって測定した。回答の選択肢は、「4.大いに共感する」、「3.共感する」、「2.まあまあ共感する」「1.あまり共感しない」「0.全く共感しない」の 5 件法を用いた。

表 17.　「ボランティアを始めるための心構え」測定指標

共感内容*	項目
人とのつながりを大切にする	コミュニケーション力
やる以上は責任を持つ	責任感
とにかく一度やってみる	チャレンジ精神
無理をしないで、自然に楽しむ	自己調整力
自分にはできること、できないことがある	自己理解
できごとの意味を考える	状況把握
少しずつ学ぶ	協調性
やめて、次に進むことも大切である	柔軟性

(*立田慶裕(2004)「ボランティアとは何か?」『参加して学ぶボランティア』玉川大学出版会より引用)

項目ごとに、事前調査と事後調査で共感の程度の平均値に有意な差があるかどうかＴ検定を用いて解析した。その結果、共感程度に有意な差は認められず、事前と事後で平均値に大きな変化はなかったことがわかった。他方、図 13 と図 14 からも読み取れるように、平均値に有意な差はなかったものの、共感の程度の強弱や順位に変化があった項目がいくつかあった。その内容は以下のとおりである。

まず、共感の程度が強くなった項目として、「とにかく一度やってみる」（チャレンジ精神）は事前調査では、「まあまあ共感する」が２人いたが、事後調査では、「まあまあ共感する」が０人となり、18 人全員が、「大いに共感する」「共感する」と回答した。

「自分にはできること、できないことがある」（自己理解）に対する共感の程度は、事前調査では第 5 位だったが、事後調査では第１位だった。事前調査では、「大いに共感する」９人、「共感する」７人、「まあまあ共感する」２人であったのに対し、事後調査では、「大いに共感する」が５人増加して 14 人、「共感する」が４人減少して３人、「まあまあ共感する」が１人減少して１人だった。

「できごとの意味を考える」（状況把握）は、事前調査では、「大いに共感する」「共感する」が合計 12 人、「まあまあ共感する」が６人だったのに対し、事後調査では、前者２つの合計が３人増加して 15 人、後者が３人減少して３人だった。

一方、共感の程度が弱くなった項目として、「無理をしないで、自然に楽しむ」（自己調整力）は、事前調査では、18 人中、「大いに共感する」「共感する」が合計 16 人、「まあまあ共感する」が 2 人だったのに対し、事後調査では、前者２つの合計が 6 人減少して 12 人、後者は４人増加して６人だった。

「やめて、次に進むことも大切である」（柔軟性）は、事前調査では、「大いに共感する」「共感する」で計 15 人、「まあまあ共感する」３人だったが、事後調査では、前者２つの合計が３人減少して 12 人、後者が３人増加して６人だった。

上記の共感の程度の強弱や順位の変化を概観すると、今回の一日体験実習週間では、「とにかく一度やってみる」（チャレンジ精神）、「自分にはできること、できないことがある」（自己理解）、「できごとの意味を考える」（状況把握）の項目では、前進的な変化があったのではないかと思われた。一方、「無理をしないで、自然に楽しむ」（自己調整力）と「やめて、次に進むことも大切である」（柔軟性）については、後進的な変化があったのではないかと思われた。このことから、学生たちは、客観的に状況把握をしながら、冷静に自己の能力を見極めつつ、これまでに経験したことのないボランティア活動に積極的にチャレンジしていたが、無理せずゆとりをもって、臨機応変に参加することはまだ難しいことが読み取れた。今回の参加者は 18 人中 14 人が１、２年生であったことから、学年も影響していたかものしれないが、今回は短期間であったことから「七夕まつり」については準備する時間が不足していたため、そのバランスをとることは、大人でも難しいと思われた。

図 13

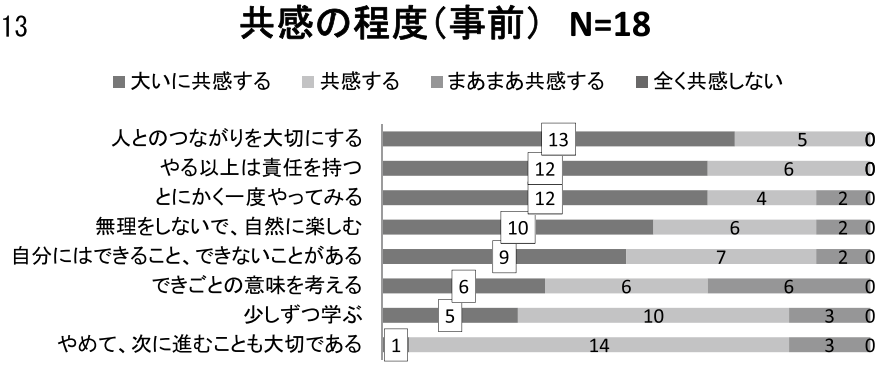
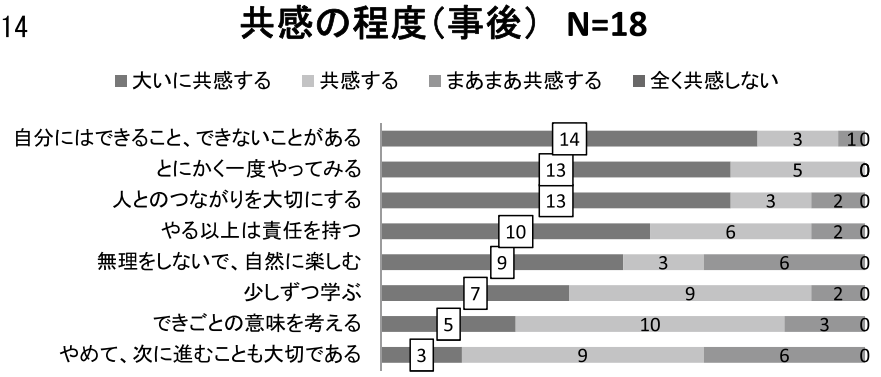


図 14



注：「あまり共感しない」と回答した人は、事前事後ともに 0 人だった。

９． 一日体験実習週間の体験（自由記述）

一日体験実習週間が、学生にとってどのような体験であったのかについて質問した。

表 18 の学生の自由記述をみると、１年生は、「楽しさ」、「楽しかった」、「学びました」、「ボランティアの第一歩」、「いい機会になりました」という肯定的なフレーズが目につくが、「もっとできることがあったはずなのに」、「自分の無力さを感じた」などの後悔の気持ちと無力感を示す感情表現もあった。２年生は、「深く知ることができた」、「楽しかった」、「貴重な体験でした」という肯定的フレーズに加えて、「人と協力し合うことの多い体験」、「やる以上は責任をもつことの必要性も感じた」などの具体的なふりかえりが行われていた。3 年生、４年生は、リーダーとしての立場から、「痛感しました」、「次の経験に活かしたい」、「反省点が多くあり」、「遣り切れない気持ちでいっぱいです」という反省的なフレーズが目立った。

表 18

設 問 / 学年	総じて、今回の一日体験実習週間は、あなたにとってどのような体験でしたか。（18 人中 15 人回答）
1	初めてガイドの体験ができたのが印象に残っています。とても緊張しましたが、ガイドの楽しさを知ることができました。
1	いろんな人と話すことができたのが楽しかった。
1	ボランティアに従事する人がどのような思いを持って取り組んでいるのか学びました。
1	一歩踏み出す感覚をつかむいい機会になりました。
1	ボランティアの第一歩
1	それぞれの実習で異なることを学べた。七夕では、自分の無力さを感じた。
1	もっとできることがあったはずなのにと思ってばかりいました。
2	自分が普段触れないものについて深く知ることができた。
2	・人と協力し合うことの多い体験だった。 ・一方でちゃんと準備することとやる以上は責任をもつことの必要性も感じた。
2	普段行かない場所へ行くきっかけになりました。楽しかったです。
2	準備の割に少ししか当日は参加できなかったりと不完全燃焼な部分はありますが、楽しかったです。次に参加するボランティアに何か活かせれば良いなと思います。
2	貴重な体験でした。
3	「話す」ことの重要性を痛感しました。
4	初めてリーダー、運営を任された機会だった。準備の大切さを知った。次の経験に活かしたい。
4	準備を一生懸命行っただけに、反省点が多くあり、みんなと意義や課題について話したあとでもやり切れない気持ちでいっぱいです。

10.　学生からの意見・感想

学生からの意見・感想は、表 19 のとおりである。これらの記述から、「積極性が大切」、「五感を刺激したい」という積極的な意見から、「２日間連続にするのは大変」、「時間が足りない」という不満、「活かしきれず悔しくもあります」という後悔の念が挙げられていた。

表 19

学年	意見・感想
1	積極性が大切だと思いました。
1	これからもいろいろな行事に参加して五感を刺激したい。
1	自信をもってできた！と言えることは少ないですが、とても勉強になりました。
2	２日間連続にするのは大変だと思います。
3	時間が足りない部分が多かったです。
4	色々と活かしきれず悔しくもあります。皆さんに申し訳ないです。次に活かせればと思います。

Ⅷ.　統計解析の結果

１． 分析結果の概要

相関分析やカイ二乗検定、一元配置分散分析、回帰分析を用いた統計的手法により、以下の 2 つの検討を行った。以下、解析結果を要約して、現時点で有意な差が認められた結果のみを掲載する。

① 参加したボランティアの数と事後の共感の程度の関係について検討したところ、参加したボランティアの数が多いほど、「人とのつながりを大切にする」への共感が高まることがわかった。
② 学習目標の達成の有無と事後の共感の程度の関係について検討したところ、参加したボランティアの数が多い人は、学習目標が達成すると、「とにかく一度やってみる」への共感が高くなることがわかった。

使用統計ソフト: IBM SPSS Statistics 22.0 Statistics Base 教育機関向け
統計解析責任者: 川畑智子

２． 分析結果

１． 参加したボランティアの数と事後の共感の程度の関係について

結論１: 参加したボランティアの数が多いほど、「人とのつながりを大切にする」への共感が高まる。

検討 1. 事後の共感の程度に影響を与えた項目について検討した。

問い: 学年、性別、所属など全ての独立変数と共感の程度の間に相関があるか?

分析①: Pearson の相関分析（両側）

結果: ボランティアの個数と、「人とのつながりを大切にする」に対する共感の程度の間に有意な相関が認められた（表 20）。P<0.001 N=18
それ以外の基本属性と有意な相関は認められなかった。

注 1）共感の程度は「4.大いに共感する」～「0.全く共感しない」の 5 件法をもちいた。

表 20

相関分析

		参加したボランティアの数	事後 無理をしないで、自然に楽しむ	事後 とにかく一度やってみる	事後 やる以上は責任を持つ	事後 人とのつながりを大切にする	事後 自分にはできること、できないことがある	事後 できごとの意味を考える	事後 少しずつ学ぶ	事後 やめて、次に進むことも大切である
参加したボランティアの数	Pearson の相関係数	1	0.000	0.000	.377	.761**	-.231	-.065	-.132	-.188
	有意確率（両側）		1.000	1.000	.123	.000	.356	.796	.601	.455
	平方和と積和	30.000	0.000	0.000	6.000	12.000	-3.000	-1.000	-2.000	-3.000
	共分散	1.765	0.000	0.000	.353	.706	-.176	-.059	-.118	-.176
	度数	18	18	18	18	18	18	18	18	18

**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。
*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

検討 2.　参加したボランティアの数が、どの程度「人とのつながりを大切にする」に対して影響を与えているのか確認した。

分析②:　一元配置分散分析（平均値の差の比較）

因子: 参加したボランティアの個数

従属変数: 事後の共感の程度

結果:　参加したボランティアの個数によって、共感の程度の平均値に有意な差があることが認められた。（F 値=10.409, P 値=0.001,　N=18）

表 21

分散分析

		平方和	df	平均平方	F	有意確率
事後　人とのつながりを大切にする	グループ間	4.811	2	2.406	10.409	.001
	グループ内	3.467	15	.231		
	合計	8.278	17			

平均値のプロット　事前と事後の変化

図 15

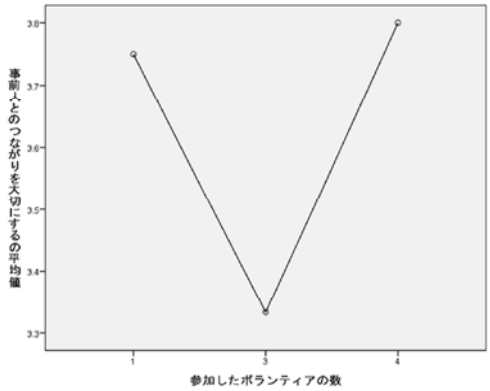
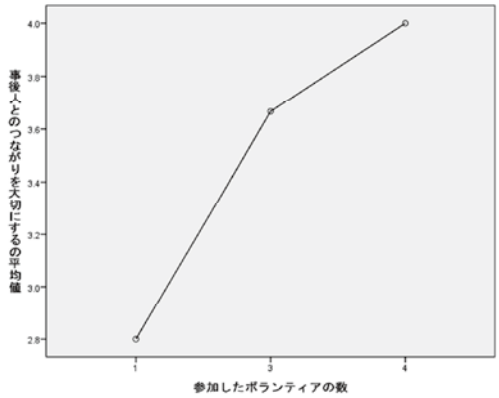


図 16



検討 3.　参加したボランティアの数と「人とのつながりを大切にする」の間に交絡因子があるかどうか検討した。

結果１．　学年が低いほど、参加したボランティアの数が多いことがわかった。

表 22

相関分析

		参加したボランティアの数	ボランティア経験	学習目標達成の有無	学年
参加したボランティアの数	Pearson の相関係数	1	-.389	-.425	-.494*
	有意確率（両側）		.123	.079	.037
	度数	18	17	18	18
ボランティア経験	Pearson の相関係数	-.389	1	.217	.104
	有意確率（両側）	.123		.402	.680
	度数	17	18	17	18
学習目標達成の有無	Pearson の相関係数	-.425	.217	1	.308
	有意確率（両側）	.079	.402		.214
	度数	18	17	18	18
学年	Pearson の相関係数	-.494*	.104	.308	1
	有意確率（両側）	.037	.680	.214	
	度数	18	18	18	19

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。

検討 4.　「人とのつながりを大切にする」に対する共感の程度に影響を与えている因子は、参加したボランティアの数なのか、それとも学年であるのか検討した。

分析③: 回帰分析（因果関係）一般線型モデル（一変量）

従属変数　共感の程度

固定因子　モデル１　参加したボランティアの数

モデル２　参加したボランティアの数、学年

結果:　学年ではなく、参加したボランティアの数が「人とのつながりを大切にする」の共感の程度に影響を与えていた。

危険率 5%水準で参加したボランティアの数と「人とのつながりを大切にする」の共感の程度に因果関係が認められた。しかし、学年とその共感の程度に因果関係は認められなかった。

モデル２　F 値 14.179（p<0.000）　調整済み R2 乗 0.608

P 値=0.003　N=18

表 23

係数[a]

モデル		標準化されていない係数 B	標準化されていない係数 標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
1	（定数）	2.411	.278		8.673	.000
	参加したボランティアの数	.400	.085	.761	4.699	.000
2	（定数）	3.062	.447		6.853	.000
	参加したボランティアの数	.319	.092	.607	3.472	.003
	学年	-.222	.124	-.313	-1.793	.093

a. 従属変数 事後　人とのつながりを大切にする

２．　学習目標の達成の有無と事後の共感の程度の関係について

結論２:参加したボランティアの数が多い人は、学習目標が達成すると、「とにかく一度やってみる」の共感の程度が高くなる。

検討 1.　学習目標の達成と共感の程度の相関について検討した。

分析①:　Pearson の相関分析（両側）

結果:　学習目標の達成の有無と「人とのつながりを大切にする」「とにかく一度やってみる」「やる以上は責任を持つ」に対する共感の程度と有意な相関が認められた。
P<0.005　N=18

考察:　学習目標の達成の有無が、上記 3 つの共感の程度に影響を与えているのではないか。

表 24

相関分析

		学習目標　達成の有無	事後　無理をしないで、自然に楽しむ	事後　とにかく一度やってみる	事後　やる以上は責任を持つ	事後　人とのつながりを大切にする	事後　自分にはできること、できないことがある	事後　できごとの意味を考える	事後　少しずつ学ぶ	事後　やめて、次に進むことも大切である
学習目標　達成の有無	Pearson の相関係数	1	-.396	-.582*	-.584*	-.574*	.079	-.175	.026	.340
	有意確率（両側）		.104	.011	.011	.013	.756	.487	.918	.167
	度数	18	18	18	18	18	18	18	18	18

*. 相関係数は 5% 水準で有意（両側）です。
**. 相関係数は 1% 水準で有意（両側）です。

検討 2.　学習目標の達成の有無に影響を与えている因子は何か?

「達成した」と回答した８人の特徴を検討した。

分析②:「達成した」と回答した８人のみを対象に、相関分析を実施した。

結果:　参加したボランティアの数とボランティア経験に有意な相関が認められた。P<0.001 N=8

考察:　ボランティア経験の有無と参加したボランティアの数が、共感の程度に影響を与えているのではないか。

注 2) 表 26 の「ボラ経験 2 階層」とは、「過去にしたことがある」と「現在している」の合計を「1.あり」、「したことがない」を「2.なし」の 2 階層に変換した変数である。

表 25

相関分析

		参加したボランティアの数	ボラ経験2階層
参加したボランティアの数	Pearson の相関係数	1	-1.000**
	有意確率 (両側)		.000
	度数	8	8
ボラ経験2階層	Pearson の相関係数	-1.000**	1
	有意確率 (両側)	.000	
	度数	8	8

**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

検討 3.　ボランティア経験の有無と参加したボランティアの数のクロス集計により、各ペアに有意な差があるかどうかを確認した。

分析③:「達成した」と回答した８人のみを対象に、カイ二乗検定を実施した。

結果:　参加したボランティアの数が多い人は、ボランティア経験がある人が多かった。
P=0.005（危険率 5%水準で有意な差が認められた。）N=8

考察:　参加したボランティアの数とボランティア経験は、学習目標の達成の有無に何らかの影響を与えているのではないか。

表 26

参加したボランティアの数 と ボラ経験2階層 のクロス表

度数

		ボラ経験2階層		合計
		あり	なし	
参加したボランティアの数	1	0	1	1
	4	7	0	7
合計		7	1	8

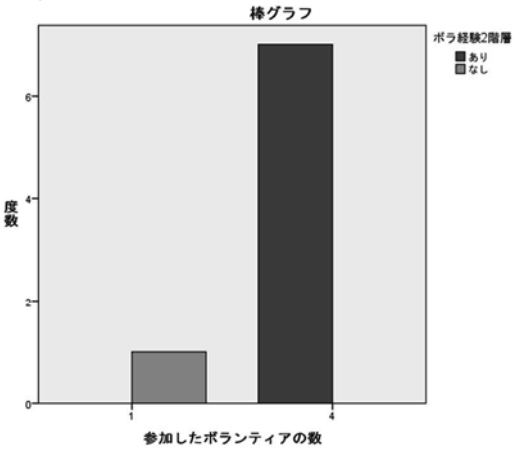
カイ２乗検定

	値	df	漸近有意確率 (両側)	正確有意確率 (両側)	正確有意確率 (片側)
Pearson のカイ２乗	8.000[a]	1	.005		
連続修正[b]	1.469	1	.225		
尤度比	6.028	1	.014		
Fisher の直接法				.125	.125
線型と線型による連関	7.000	1	.008		
有効なケースの数	8				

a. 3 セル (75.0%) は期待度数が 5 未満です。最小期待度数は .13 です。

b. 2x2 表に対してのみ計算

図 17



検討 4.　参加したボランティアの数３個以上の 13 人のみで、学習目標の達成の有無と「とにかく一度やってみる」「やる以上は責任をもつ」「人とのつながりを大切にする」の関係を検討した。

分析④:　Pearson の相関分析（両側）

結果:　学習目標の達成の有無と「とにかく一度やってみる」（P<0.001）、「やる以上は責任をもつ」（P<0.005）の間に有意な相関が認められた。

参加したボランティアの数が多い人は、学習目標が達成すると、「とにかく一度やってみる」「やる以上は責任をもつ」に対する共感の程度が高くなる。

注 3)　学習目標の達成の有無については「はい」「いいえ」の２件法ではなく、「1.　はい（達成した）」「2. いいえ（達成しなかった）」「3. わからない」の３件法を用いた。

表 27

相関分析

		学習目標　達成の有無	事後　とにかく一度やってみる	事後　やる以上は責任を持つ	事後　人とのつながりを大切にする
学習目標　達成の有無	Pearson の相関係数	1	-.734**	-.597*	-.399
	有意確率 (両側)		.004	.031	.177
	平方和と積和	10.308	-3.923	-4.385	-1.231
	共分散	.859	-.327	-.365	-.103
	度数	13	13	13	13
事後　とにかく一度やってみる	Pearson の相関係数	-.734**	1	.303	-.192
	有意確率 (両側)	.004		.314	.529
	平方和と積和	-3.923	2.769	1.154	-.308
	共分散	-.327	.231	.096	-.026
	度数	13	13	13	13
事後　やる以上は責任を持つ	Pearson の相関係数	-.597*	.303	1	.700**
	有意確率 (両側)	.031	.314		.008
	平方和と積和	-4.385	1.154	5.231	1.538
	共分散	-.365	.096	.436	.128
	度数	13	13	13	13
事後　人とのつながりを大切にする	Pearson の相関係数	-.399	-.192	.700**	1
	有意確率 (両側)	.177	.529	.008	
	平方和と積和	-1.231	-.308	1.538	.923
	共分散	-.103	-.026	.128	.077
	度数	13	13	13	13

**. 相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

*. 相関係数は 5% 水準で有意 (両側) です。

検討 5.　参加したボランティアの数が３個以上の 13 人を対象に、学習目標の達成の有無とボランティア経験の有無のどちらが、「とにかく一度やってみる」「やる以上は責任をもつ」に影響を与えているのか検討した。

分析⑤:　回帰分析（因果関係）一般線型モデル（一変量）

従属変数　「とにかく一度やってみる」

固定因子　モデル１　学習目標の達成

モデル２　学習目標の達成、ボランティア経験の有無

結果:　学習目標の達成の有無は、共感の程度に影響を与えていたことがわかった。

モデル１　Ｆ値=12.870　Ｐ値=0.004　調整済Ｒ２乗　0.497

危険率 5%水準で有意な因果関係が認められた。

考察:　モデル 2 が棄却され、ボランティア経験の有無ではなく、学習目標の達成の有無が「とにかく一度やってみる」の共感の程度に影響を与えていた。

尚、学習目標の達成の有無と「やる以上は責任をもつ」との間に有意な因果関係は認められなかった。

表 28

モデルの要約

モデル	R	R2 乗（決定係数）	調整済 R2 乗（調整済決定係数）	推定値の標準誤差
1	.734[a]	.539	.497	.341
2	.735[b]	.540	.448	.357

a. 予測値:（定数）、学習目標　達成の有無。

b. 予測値:（定数）、学習目標　達成の有無，ボラ経験 2 階層。

分散分析[a]

モデル		平方和	df	平均平方	F	有意確率
1	回帰	1.493	1	1.493	12.870	.004[b]
	残差	1.276	11	.116		
	合計	2.769	12			
2	回帰	1.495	2	.747	5.865	.021[c]
	残差	1.274	10	.127		
	合計	2.769	12			

a. 従属変数 事後　とにかく一度やってみる

b. 予測値:（定数）、学習目標　達成の有無。

c. 予測値:（定数）、学習目標　達成の有無，ボラ経験 2 階層。

係数[a]

モデル		標準化されていない係数 B	標準化されていない係数 標準誤差	標準化係数 ベータ	t	有意確率
1	（定数）	4.366	.210		20.776	.000
	学習目標　達成の有無	-.381	.106	-.734	-3.588	.004
2	（定数）	4.391	.309		14.213	.000
	学習目標　達成の有無	-.372	.133	-.718	-2.790	.019
	ボラ経験 2 階層	-.033	.282	-.030	-.116	.910

a. 従属変数 事後　とにかく一度やってみる

図 18

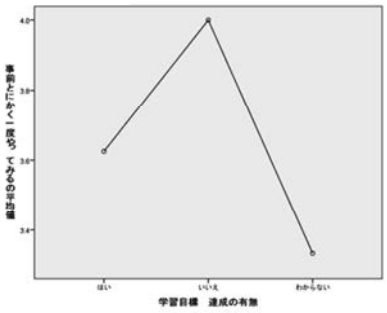
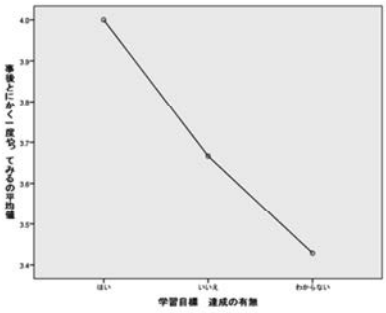


図 19



Ⅸ. 資料

１．事前アンケート　調査票

一日ボランティア体験実習週間

事前アンケート（記名）　ご協力のお願い

2016 年度受講生の皆さんへ

このアンケートは、本科目の受講生を対象に実施しています。本アンケートは、これから実施予定の「一日ボランティア体験実習週間」が、皆さんのボランティア活動に対する態度にどのような影響を与えたのかについて知り、**皆さんがボランティア体験から何を学んだのかについて考えるために、参考として試験的に実施するものです。実習の前後で 1 回ずつ計 2 回実施します。記名でご協力お願いいたします。**

本アンケートの結果は、公表する場合がありますが、個人が特定されないよう統計的処理を行いますので個人のプライバシーが侵害されることはありません。回収したアンケート票は、人の目の触れない場所に厳重に保管いたします。また、本アンケートは、本目的以外に使用することはありません。皆さんのプライバシーを保護することをお約束します。尚、**本アンケートは、この授業の成績評価とは一切関係ありません。本アンケートに回答する否かは任意です。**本アンケートに関しましてご質問・ご意見などございましたら下記の連絡先にご遠慮なくお問い合わせください。皆さまにおかれましてはご多忙の折、大変恐縮ですが、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 28 年 7 月 6 日

木村純　　北海道大学名誉教授
川畑智子　北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門特任准教授
問い合わせ先:　011-706-7312 (川畑研究室直通)

〈ご回答前に必ずお読みください〉

……

このアンケートは、ご本人が直接ご回答ください。設問の順番どおりにご回答ください。回答は、ありのままをご回答ください。回答しにくい質問は飛ばして結構です。無理に回答する必要はありません。アンケートの途中でやめても構いません。回答したくない場合は、白紙のままご提出ください。

……

設問１．　あなたは、ボランティアをした経験がありますか。

あてはまるものに一つだけ〇してください。

1. 過去にしたことがある。
2. 現在している。
3. 経験はない。

今回の一日体験実習週間で参加予定のボランティアについてお聞きします。

設問２．　あなたが参加する予定の実習は、以下のうちどれですか。

あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1. キャンパスウォークツアー
2. ガイドボランティア
3. 留学生とアフタヌーントーク
4. 作品解説ボランティア
5. 七夕まつり

設問３．　上記の設問１の選択肢のうち、以前にしたことがあるものはありますか。

1. いいえ、ありません。　　2. はい、あります　→ ＿＿＿番（複数回答可）

設問４．　上記の設問１の選択肢のうち、最も関心のあるものはどれですか。

あてはまる番号を一つだけ書いてください。

＿＿＿番

その理由は何ですか。以下のうち、あてはまるものに一つだけ〇してください。

1. 面白そうだから
2. ガイドをしてもらったことがあるから
3. 知り合いでガイドボランティアをしている人がいるから
4. ガイドボランティアをしたことがあるから
5. 以前から知っていたから
6. ただなんとなく

今回の一日体験実習週間の目的は、「一歩踏み出す勇気をもつこと」です。

設問５．　この実習に対する、あなた自身の学習目標を書いてください。

具体的に書いてください。

例　私は人と話すことが苦手なので、この実習で自信をつけたい。

以下では、皆さんのボランティアに対する態度についてお聞きします。

設問５．　あなたは、現在、次の点についてどれくらい共感できますか。

4.大いに共感する　3.共感する　2.まあまあ共感する　1.あまり共感しない　0.全く共感しない

以下の各質問について回答してください。	共感の程度 一つに〇をつけてください。				
Q1.　無理をしないで、自然に楽しむ	4	3	2	1	0
Q2.　とにかく一度やってみる	4	3	2	1	0
Q3.　やる以上は責任を持つ	4	3	2	1	0
Q4.　人とのつながりを大切にする	4	3	2	1	0
Q5.　自分にはできること、できないことがある	4	3	2	1	0
Q6.　できごとの意味を考える	4	3	2	1	0
Q7.　少しずつ学ぶ	4	3	2	1	0
Q8.　やめて、次に進むことも大切である	4	3	2	1	0

お名前　　学年　　学部

ご協力ありがとうございました。

２．事後アンケート　調査票

一日ボランティア体験実習週間
事後アンケート（記名）　ご協力のお願い

2016 年度受講生の皆さんへ

このアンケートは、本科目の受講生を対象に実施しています。本アンケートは、今回実施した「一日ボランティア体験実習週間」が、皆さんのボランティア活動に対する態度にどのような影響を与えたのかについて知り、**皆さんがボランティア体験から何を学んだのかについて考えるために、参考として試験的に実施するものです。記名でご協力お願いいたします。**

本アンケートの結果は、公表する場合がありますが、個人が特定されないよう統計的処理を行いますので個人のプライバシーが侵害されることはありません。回収したアンケート票は、人の目の触れない場所に厳重に保管いたします。また、本アンケートは、本目的以外に使用することはありません。皆さんのプライバシーを保護することをお約束します。尚、**本アンケートは、この授業の成績評価とは一切関係ありません。本アンケートに回答する否かは任意です。**本アンケートに関しましてご質問・ご意見などございましたら下記の連絡先にご遠慮なくお問い合わせください。皆さまにおかれましてはご多忙の折大変お手数ですが、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

平成 28 年 7 月 13 日

木村純　　北海道大学名誉教授
川畑智子　北海道大学高等教育推進機構高等教育研究部門特任准教授
問い合わせ先:　011-706-7312 (川畑研究室直通)

〈ご回答前に必ずお読みください〉

……

このアンケートは、本人が直接ご回答ください。設問の順番どおりにご回答ください。
回答は、ありのままをご回答ください。回答しにくい質問は飛ばして結構です。無理に回答する必要はありません。アンケートの途中でやめても構いません。回答したくない場合は、白紙のままご提出ください。

……

設問１．　あなたが参加した実習は、以下のうちどれですか。

あてはまるものすべてに〇をつけてください。

1. キャンパスウォークツアー
2. ガイドボランティア
3. 留学生とアフタヌーントーク
4. 作品解説ボランティア
5. 七夕まつり

1-1. 上記のうち、最も心に残ったものはどれですか。

あてはまる番号を一つだけ書いてください。

＿＿＿番

1-2. その理由は何ですか。具体的に書いてください。

今回の一日体験実習週間の目的は、「一歩踏み出す勇気をもつこと」でした。

設問２．　この実習を通じて、あなた自身の学習目標は達成されましたか。

あてはまる番号に一つだけ〇をつけてください。

1.　はい　　2.　いいえ　　3.　わからない→設問３へお進みください。

2-1. 上記で「はい」と回答した方にお聞きします。

設問２の選択肢のうち、特にどのボランティア体験を通じて達成されたと思いますか。

あてはまる番号を一つだけ書いてください。

＿＿＿＿番＿＿その理由は何ですか。具体的に書いてください。

2-2. 上記で「いいえ」と回答した方にお聞きします。

設問２の選択肢のうち、特にどのボランティア体験において達成しなかったと思いますか。あてはまる番号を一つだけ書いてください。

＿＿＿＿番＿＿＿その理由は何ですか。具体的に書いてください。

設問３．　今回の一日体験実習週間で困ったことや悩んだことはありましたか。

1.　はい　　2.　特にない→　設問４へお進みください。

↓

3-1. その問題は解決しましたか。　　1.　はい　2.　いいえ

3-2. 「はい」と回答した方にお聞きします。

その問題をどのように解決または克服しましたか。

3-3. 「いいえ」と回答した方にお聞きします。　それはどのようなことでしたか。

差支えなければ、書いてください。

設問４．　あなたは、今回の実習を体験して、次の点についてどれくらい共感できますか。

4.大いに共感する　3.共感する　2.まあまあ共感する　1.あまり共感しない　0.全く共感しない

以下の各質問について回答してください。	共感の程度 一つに〇をつけてください。				
Q1.　無理をしないで、自然に楽しむ	4	3	2	1	0
Q2.　とにかく一度やってみる	4	3	2	1	0
Q3.　やる以上は責任を持つ	4	3	2	1	0
Q4.　人とのつながりを大切にする	4	3	2	1	0
Q5.　自分にはできること、できないことがある	4	3	2	1	0
Q6.　できごとの意味を考える	4	3	2	1	0
Q7.　少しずつ学ぶ	4	3	2	1	0
Q8.　やめて、次に進むことも大切である	4	3	2	1	0

設問５．　総じて、今回の一日体験実習週間は、あなたにとってどのような体験でしたか。
ご自由にお書きください。

質問は以上です。

最後に、ご意見・ご感想などございましたら書いてください。

※このアンケートは記名です。お名前をお書きください。

お名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿学年＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿学部

ご協力ありがとうございました。

３． 事前研修　配付資料

事前研修	2016 年７月６日（水）　北海道大学情報教育館４階共用多目的室（１）
講師	長岡宗男氏（札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク役員）
内容	「北大キャンパスガイドツアーについて」

北大キャンパスガイドツアーについて

平成28年7月6日

札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワーク
新渡戸カレッジ　フェロー
長岡宗男

ボランティアを始めたきっかけ

- ロータリー財団奨学生に選ばれた（1972年）
  - 道内のロータリークラブを訪問
  - 米国マジソンロータリークラブ会員の奉仕の精神
  - マジソン滞在中に人の親切心に触れた

↓

いつかは恩返しをしたいと思うようになった

- 早期退職をして、札幌へ戻る（2012年）
- 札幌国際プラザ外国語ボランティアへ登録（2013年）
  - ボランティアの自主活動を行うネットワークへ加入

北大キャンパスガイドの企画提案

- 年齢、経験から自主活動の企画・運営を委託され、新規プロジェクトを提案するよう依頼
  - 何をしたい？→自問自答（市内ガイド、案内所等）

⬇

- 予約なしのガイドツアー（海外での参加経験）
  - 指定の時間、場所に行けば、ツアーに参加できる（旅行客はメリット）
- 北大キャンパスガイドツアーを思いついた
  - 北大は土地勘があった
  - 場所が構内に限定
  - どこの団体も定期的に実施していない

北大キャンパスガイドツアー開始前の調整（2014年）

- 北大からの許可を得る
  - キャンパスガイドツアーを行う
  - インフォーメーションセンターを集合場所として使用
  - ツアーに使う道具（旗、報告書等）を置かせてもらう
- ネットワーク役員会の承認を得る
  - ツアー概要説明（ルートの選択、開催時間、回数等）
  - ガイド養成
  - 外部への案内

北大キャンパスガイドツアー概要

- 期間：6月1日～10月30日
- 実施日：毎週水、金、土、日曜日（小雨決行）
- 時間：午前10時から11時半
- 集合場所：インフォメーションセンター　エルムの森
- 参加対象者：原則外国人と日本人の個人旅行者
- 使用言語：英語と日本語
- ルート：正門案内板→佐藤昌介像→南門→中央ローン→古川講堂→クラーク像→昆虫学・養蚕学教室→農学部→農場→ポプラ並木→総合博物館→人工雪結晶碑→大野池→イチョウ並木前

ツアー準備

- ガイドを養成する
  - ガイドテキストの作成（日本語、英語）
  - ガイド希望者募集
  - ガイド教育受講者をガイド登録
    - 座学研修
    - 現地研修
- ガイドのシフト編成
- ガイドツアーの認知度を上げる
  - チラシ
    - デザイン
    - 印刷・発注
    - 配布
  - Facebookの利用

    https://www.facebook.com/sapporoflv.cityguide

過去二年間の実績

北大キャンパスツアー参加者推移

（参加人数/実施回数）

	6月	7月	8月	9月	10月	合計	平均/回
H26年度	135/12	112/14	155/13	114/11	126/16	642/66	9.7
H27年度	116/15	93/16	110/18	62/14	120/14	501/77	6.5

外国人参加数

（参加人数/実施回数）

	6月	7月	8月	9月	10月	合計	平均/回
H26年度	14/4	7/9	17/10	12/6	17/6	68/35	1.9
H27年度	35/8	19/6	46/11	4/3	38/9	142/37	3.8

平成27年のガイド参加数

	6月	7月	8月	9月	10月	合計
実施回数	15	16	18	14	14	77
延べ人数	46	41	47	40	44	218
実人数	27	25	30	24	29	51

ガイドツアーの課題

- 参加者数の増加
  - 目標：年間1000名、うち外国人500名
- ガイド登録者の参加促進
- 後継者の育成
  - ガイド希望者
  - 裏方作業者（シフト調整、広報宣伝）

４．　七夕まつり企画運営委員会　プレゼン資料

企画報告	2016 年７月６日(水)　北海道大学情報教育館４階共用多目的室（１）
報告者	佐藤彩乃（文学部４年生）委員長 三井薫　（文学部３年生）副委員長
題目	「七夕まつり」

概要

- 7月12日(火)11:30－13:30
- 札幌国際プラザ外国語ボランティアSKYと共催
- コーナー
  - 暑中見舞いはがき作成
  - そうめん試食
  - 南京玉簾実演
  - 七夕飾り(折り紙)、短冊作成
  - 七夕について(由来と地域差)
  - 紙テープの星作成
  - チェーン作成
  - 写真撮影

SKYの方におまかせ

→ SKYの方と一緒に

私たちだけでやります

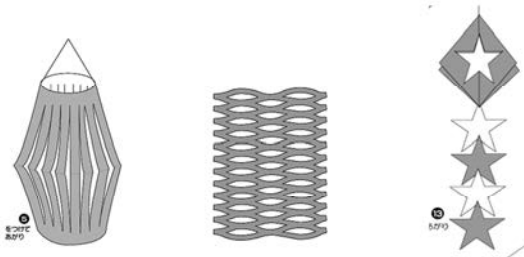
七夕について

- 七夕の由来
- 七夕の地域差
  - 模造紙で発表
    →授業後プリントを基に作成します。
    時間がある方はお手伝いお願いします。
  - プリント配布
    →時間がない人にも手渡してください。

- 質問に対応できるよう、特殊な英単語等の知識もつけておいてください！

七夕飾りの折り紙

- 七夕に使う飾りの折り紙を作成します。
- 作るもの：あみかざり、ちょうちん、ほしかざり（配布プリント参照）
- ハサミ、のりを使いながら教えていきます。



紙テープの星

- 紙テープを折って星の飾りを作ります。（作り方は配布プリント参照）
- 少しコツがいるので、何度かつくって練習するとよいと思います。

短冊、折り紙のチェーン

- 短冊：

ボランティア団体SKYの手伝いという形で行います。書き方や日本語訳の手伝いをするのではないかと思います。

- チェーン：

細く切った折り紙を一人一つ繋いでいってもらいます。

時間がかかるものではないので、気軽に留学生の方に声掛けしてやっていきましょう。

写真撮影コーナー

- 甚平・浴衣を着て留学生と写真撮影を行います。
- 浴衣・甚平を持っている人は是非ここで着て頂きたいです！
- 川畑先生が甚平を一着貸してくださるので、浴衣など持っていなくても、できる方がいれば是非お願いします。
- 留学生はSNSなどに投稿すると思うので、顔出しが気になる方はお面を使って撮影します。
- 留学生側も着物のような服を着て撮影すると思います。

（国際本部に準備あり）

皆さんに準備してほしいこと

- 配布したプリントに目を通し、一通りの説明をできるようにしておきましょう。
- 七夕の由来（日本文化的なところ）について、できたら、プリント以外のことも（語彙など）掘り下げるとよいです。
- 折り紙などの工作系は自分でも作れるようにしておきましょう。
- のり・ハサミある方はなるべく持って来て頂ければありがたいです。
- モデルにならなくても、甚平やゆかたがある方は着て頂ければ嬉しいです。雰囲気が出るので。

Ｘ.　　一日体験実習週間の模様

１．事前研修の模様

2016 年７月６日(水)　事前研修　北海道大学情報教育館４階共用多目的室（１）

写真１　学生にガイドボランティアの助言をする長岡宗男さん（右から 2 番目）

写真 2　七夕まつり企画の事前準備の模様

２． 北大キャンパスウォークツアーの模様

2016 年７月９日(土) 9:45～11:30　北海道大学キャンパス内

写真３　北大キャンパスウォークツアー
ガイドボランティア体験開始

写真４　覚悟を決めるカレッジ生

写真５　クラーク会館のガイドに挑戦

写真６　北大総合博文館のガイドに挑戦

写真７　ポプラ並木のガイドに挑戦

写真８　ポプラ並木のガイドに挑戦

３.「留学生とアフタヌーントーク」の模様

2016 年７月９日(土) 13:30～15:30（札幌国際プラザ内）

（左から２番目・３番目がカレッジ生）

（中央奥がカレッジ生）

（左から２番目・３番目がカレッジ生）

（中央奥から右１番目･2 番目と手前左がカレッジ生）

（中央２人がカレッジ生）

（手前左がカレッジ生、中央奥の右がカレッジ生）

４． 野外美術館作品解説ボランティアの模様

7/10（日） 10:00～12:00　（札幌芸術の森野外美術館内）

※雨天のため、途中から野外展示作品の紹介、野外美術館作品解説ボランティアの活動紹介に変更。

写真 9　ボランティアの皆さんに歓迎される

写真 10 ブロンズ磨きに参加

写真 11　野外で作品解説を聴く

写真 12　野外で作品解説を聴く

写真 13　箱の中を覗いて作品鑑賞

写真 14　作品解説ボランティアの紹介

５． 七夕まつり企画の模様

2016 年 7 月 12 日(火) 11:30 ～13:30 「留学生のための日本紹介 テーマ:七夕」
（北海道大学国際連携機構１階ロビー内）

写真 15 七夕かざりを見る留学生(右 3 人)

写真 16 留学生（中央）に折紙の星の作り方を教える（左右）

写真 17 留学生を案内する

写真 18 留学生に話しかける

写真 19 留学生の折り紙を見守る

写真 20 七夕かざりを作る

写真 21　留学生に七夕の紹介をする

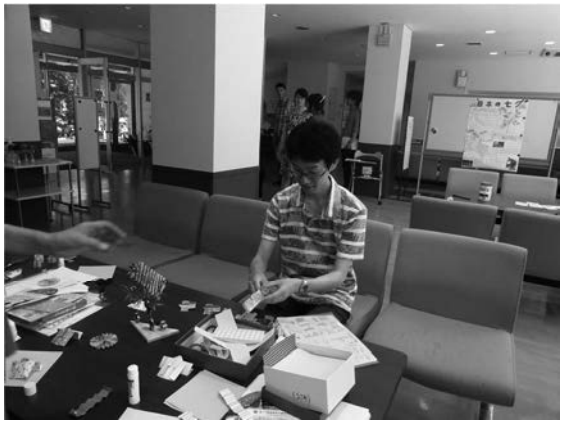


写真 22　七夕かざりを黙々と作る

写真 23　留学生とけん玉遊び

写真 24　留学生と楽しくおしゃべり

写真 25　留学生の動きを観察する

写真 26　グループで打合せ

６． ふりかえり会の模様

2016 年７月 13 日(水) 18:15～19:45　北海道大学情報教育館４階共用多目的室（１）

写真 27　皆で意見を出し合う

写真 28　北大キャンパスウォークツアーの長岡さん（左奥）

写真 29　札幌時計台ガイドボランティアの近江谷さん（中央奥）

写真 30　「留学生とアフタヌーントーク」ボランティアの宇佐美さん（中央奥）

写真 31　野外美術館作品解説ボランティアの大滝さん、菅江さん、川村さん（手前中央から右へ 大滝さん、菅江さん、川村さん）

写真 32　国際連携機構の田村さん（中央右）

謝辞

一日体験実習週間の実施にあたり、多くの方々にご指導、ご助言をいただきました。

新渡戸カレッジフェローの長岡宗男フェローを始め、札幌国際プラザ外国語ボランティアネットワークの近江谷和彦様、宇佐美礼子様、吉村邦夫様、ＳＫＹの皆様、そして、札幌芸術の森野外美術館ボランティアコーディネーターの石谷正美様、同じく札幌芸術の森野外美術館作品解説ボランティアの入屋聖子様、菅江武様、川村廣子様、大滝友子様には、快く本実習週間にご賛同くださいまして誠にありがとうございました。

皆さまには、企画の段階から熱心にご相談にのっていただき、学生のために創意工夫したボランティア体験プログラムを作ってくださいました。また、最後のふりかえり会まで終始一貫して学生を見守ってくださいましたこと、心から感謝申し上げます。学生たちは、皆さまから多くのことを学び、充実した時間を過ごすことができました。本実習週間は、ボランティアの皆さまのご協力なくして実現できませんでした。学生にこのような貴重なボランティア体験学習の機会を与えてくださいましたこと、この場をかりて重ねてお礼申し上げます。

ご協力ありがとうございました。

2016 年 12 月吉日

北海道大学新渡戸カレッジボランティア科目担当　木村純・川畑智子

新渡戸カレッジボランティア　一日体験実習週間「2016 年 7 月 6 日～7 月 13日」調査報告書	
発行日	2016 年 12 月　初版
発行者	北海道大学新渡戸カレッジボランティア
	科目責任者　木 村 純　　北海道大学高等教育推進機構名誉教授
	川畑智子　　北海道大学高等教育推進機構特任准教授